

戀は地上に平和を與へ
荒ぶる海を静む

戀は海を静め

苦しむ者を眠らしむ

と詩人が歌ふ、甘美な『薔薇を撒きちらした道』を、なせに
サッフォは、歩くことを拒まれたかと私達は、身をつまされ
て、痛嘆の聲を思はず放つのである。

失戀に、みづから死を決行したといふ、サッフォの訃報を
耳にしたレスボス人は、『星へもどごくほご尊く名高い』人に、

帝王者に對するよりも、深い哀悼の意を表した。そして、冥
福を祈るためにとて一字の寺院を、サッフォを生んだ、光榮
の地に建てた。森嚴な祭壇の前に、島人の禮拜は、決して怠
らなかつた。

アポロの子イオンの苗裔たる、イオニア人のサッフォの名
は、かくして不朽であり、久遠である。——讚美すべき大サッ
フォの名！

VI

『サップフォ詩体』とか、或は『サップフォ風』の名の下に、サップフォ自身の詩篇、及びその後の詩人が模倣した、詩歌のスタイルを、彼女が、獨創的に作爲し開拓したことは、詩壇の分野にとつて、極めて大きい、貢献といはなくてはならない。

現代に至るまでも不死の生命をもつて、遺されてきた、その優れたる作品に就いて、創作的特徴の点を擧げるならば、先づ第一に、熱烈であり悲痛であるといふことから、始めな

くてはならない。次に、それが眞摯、清澄、典雅、優美である点に及ぼしたい。第三には、粉飾とか技工とかを施すことなしに、自然そのままの純眞さ素直さで、讀者の情緒に對し、強烈なアッピールをもつて、磅礴することである。

この脈脈として、人に迫つてくる情趣から、デョセフ・アディソンは、サップフォの作詩に、次のごとく、嘆美の聲を放つてゐる。

『古代の完全な詩人の中で、サップフォの作品の美しさを、その斷篇が、示してゐるやうに、美しいものはない。……人人は、かういふことがわかる。彼女の詩

想は、すべて自然のままであつた。自惚れとか、不幸にも傳播した、私達現代の抒情詩の多くに見られる、ウィットの傾向といつたやうな点に染つてゐない。

彼女の靈は、「愛」と「詩」とを作つたやうに見へる。彼女は、すべてその温みの中にバッシヨンを感じた。その徴候の中に詩作した。』

しかも尙、田園的景觀を巧妙に織りなした、民謡や牧歌やといふべき、ふつくりした匂ひやほのかな味ひなどを、その製作から感ぜられることも忘れてはならない。土に禱る心もち、土に頬を付けて自然の息吹に親しむといつた、感じのデ

リカシイ、その感味を表現する語彙のシイメトリイに、著しい注意を拂はせる。とにかく、詩的表現なり描寫なりの基調は、彼女が、モットオとする

『見て美しい人は、善き人である。また、善き人は、やがて美しくなる。』

の人生觀の上におかれたものと、いはなくてはならない。殊に、何物にもまして、『おお、黄金なす愛よ、汝なくば何の生、何の歡喜ぞ……』と紀元前第七世紀の挽歌詩人メムアマスの歌つたごとき、戀愛の體驗をもつてゐたから、作品の主想な

り題材なりには、小兒、兄弟、花等が多い外に、エロスやヅィナスの讚歌、美男、美女、戀愛、婚姻を頌讚したものが、尠ないわけではない。それらの詩こそ、シエレエのいふ、『魂のひびき』でなくてはならない。その中でも婚姻讚歌の作品は、殊に注意すべきものである。婚姻讚歌は、紀元前期のギリシヤ詩壇に、汎く行はれた詩の一形式で、『夜曲』と『朝曲』の二つから成り立つたものであるが、約三世紀の後に出た、詩人テオクリトスは、サッフオのエオリヤ語を復活して、八十年行を有する『ヘレンとメネラウスの婚姻讚歌』の傑れた作を試みたことを、知つておきたい。

サッフオの一生に作られた詩歌は、すべて九卷の『抒情詩』と、その他に『諷詩』、『哀歌』^{エレジイ}などを含んだものから成つてゐる。これら名篇のすべては、帝政ロオマの治世に於て、『ラテン語を、抒情詩の型に盛るのは、容易の業ではない。』といはれたものをばやがて、『すべて私達ロオマ人に屬する文藝』にした、と評するクァンチリアヌスから讚辞を呈せられた、かの有名なホラテユウス・ホレエスの時代まで、完全に繼承されてきた。然るに、その後に至つて、作品の姿は、支離滅裂に散逸の悲運に陥り、帝政の末期即ち、ロオマ文學の頽唐期である、ドミチアンの『白銀時代』^{シルヴァ・エネア}には、實に慘狀眼もあてられぬものとなつて了つた。現存してゐる完膚なものは、た

だ僅に『アフロディテ讃歌』と、『愛人頌歌』の二篇の『オオド』を擧げるだけである。僅に完全に遺された二篇が、最も華麗にして、情調的に秀てゐることはいふまでもなく、曰くデリカシイ、曰くフレッキンビリテイ、曰くパッショネエト、曰く何、曰く何といつた、抒情詩に必然なくてはならないところの各要素をもち、これら綜合された、エレメントに加へるに、一種優婉な、エロティックな色合をもつてゐるのを、私達は、ごうして見逃すことができやう。この外に、斷章斷片として哀惜に堪えざらしめる、寶石の貴重さをもつものはすべて百七十種の數を擧げ得るが、それぞれに表現された、詩形詩体の様式は、多種多様である。しかして、その詩作に

は、五十の韻律が、用ひ盡くされたことを特記したい。

『サッフオ風』の詩体は、後世多くの詩人に興味を惹き、可なり多く模倣されたことで、一層有名である。その尤なるものを、前述のホラテュウス・ホレエスに、共和ロオマの詩人カツルに求めることができる。後者が、サッフオ張りで、『メネラウスの結婚讃歌』一作を、詩壇に公にしたことは、改めていふまでもない。その他、心の園に咲いたくさぐさの詞華は、いづれも、ラテン文學の絢爛なクラッシズムのアンソロヂイによつて、人皆の知悉するところである。

ポオプは、自作のオオドに就て、サッフオの詩のことを、

次のやうに告白してゐる。

『私の題には、今、アドリアンの詩句や、サッフオの佳句の断片や、その他で、いつばいになつてゐる。』

『サッフイック・ヴァアス』に對する、崇拜家乃至憧憬者が、ラテン時代以後、近代の詩壇に及んで、續續輩出した類例は、いくらあるかわからない。

詩人アルフレ・ド・ミュッセの『われに、やさしき言葉をかける、わが母ギリシヤ』に

ギリシヤなり

さはれ

生けるギリシヤ

今やなし

といふ、古代ギリシヤを吊ふ、世にも悼しい哀歌を歌ふ時にも、二十五世紀以前に死んだ女性ギリシヤの權化である、サッフオの靈魂は、今日尙ヴィヴィッドに生きてゐるのを考へ至つて、私達は、アウグスト・ベエベルならずとも、『サッフオ……等の婦人は、私達の極度の讚美に價する。彼女等の前

に出れば、多くの男性は光を失ふ。』として、ディオティマ、ハイパシヤ、ロオラン夫人、メリイ・ウォルストンクラフト、オリムプ・ド・グウジュ、マダム・ド・スタエル、デョルヂユ・サン等偉大な巾幗者流の筆頭に、サッフオの名を掲げなくてはゐられない。かくして、私達は、その薔薇を愛した、『薔薇のサッフオ』に、めぐしい莖をいつくしんだ『莖織るサッフオ』に、オオギユウスト・コントの名句『生きてる過去』を、心から捧げたいのである。

古代ギリシヤの廢墟に佇む、美の巡禮者のごとく、または、地下深きところに、數千年間秘密の夢をこめて埋れてゐた、

ギリシヤの古瓶を發掘して、壺の中に傷心の涙を注いだ詩人のごとく、さては、ネオ・ヘレニズムの人人が、トルソオ美に對するやうな、その純な感觸をもつて、寶石珠玉の破片となつた、大サッフオの藝術の一つ一つを愛撫しやう。その色、その匂、その韻は、私達の心の糧となるに充分である。

アフロディテ讃歌

光曜の中に居ます

不死のアフロディテよ

ツォイスの娘、女魔術者

我は君に願ひ奉る

この歎き悶えの中に
我を死なしめ給はざれ
美の女神よ

ここに來ませ
かつて來ませしがごと
君遙にわが
歎きの聲を聞きて
金色の
父の宮居を後にして
來ませしがごと

君が戦車に
輓し給へ
君を運ぶ鳩は美し
速かに薄闇の地に
進路を向けて
厚き翅うちふりつつ
いと高き天より
エエテルの中を降るよ
早も彼等は着きぬ

されば君

あはれ祝されし女神よ

微笑する花輪は

君が不死の歌をかこむ

我が悲しみの源をば

告げしめよかし

我が君を迎へまつりし

その源を

何をしも我が

狂へる心のいとど願へる

君は叫ぶ

誰をしもかの甘き追求は

願ふぞと

今し勝ちて

汝が愛に導くならずや

わがサッフオよ

そも誰が汝に

悪をなすや

今し彼は逃ぐれど

東の間に従ひ

今し彼は汝が
賜物を拒めど
束の間に受けなん
未だ彼なほ愛せざれど
束の間に
愛^めで慈しまん
汝が願はじとて
さらば女神よ來ませ
我が憂^いひを癒^いし
我全身の願ひを

今し許させ
今もまた
ありし日のごと
我が護りとならせよ

アフロディテとは、ウオオタア・ペエタアが『ルネッサンス』で賞讃してゐる、ポッティチェリイの繪畫『海から生ずるヴィナス』で有名な、美と戀の女神である。『アフロディテ』といふ名からして、『海から生れた』の意味をもつてゐる。プラトオの『饗宴篇』によると、アフロディテの誕生の日には、もろもろの神は、祝福の饗應を催した。それ

は、ツォイスとデュウノオとの間に生れた、最も愛する娘である。ホメロスの『イリアッド』には、マアスの妃となつたと記されてゐる。この他シェイクスピアの詩篇に描寫された、アドニスとの神話は、人の知るところである。海の泡から生れ出たアフロディテは、西風に吹き送られて、キプロスの島に着いた。その時、ある生物の美にうたれて、眺め入つてゐると、足の觸れたところから、さまざまな花が、一時に群がり咲き揃つた。『四季』の女神は、彼女を迎へて、香の高い花の冠を編み、五色の上衣を織つて盛装させ、神神の前に伴れて行つた。やがて、彼女は花の女神となり、庭園の女神、その上愛、結婚の女神ともなつたとい

ふ神話がある。

愛人頌歌

彼はしも

不死の神神のごと聖なり

常に君が傍に座し

君が言葉に

耳傾け

君をみつむる

かの若人は

やさしく語り

美しくほほゑむ

我が安息の

魂を奪ひ

我が胸に

かかる騒ぎを起せしは

彼なりき

我が見し時

我れ不黨となり

我が息は失せ

我が聲は消えぬ

我が胸は燃えぬ

妙なる焔は

我が命の全組織を

馳せめぐり

我が霞める眼の上に

暗きものかかり

我が耳は空ろなる

ささやきに鳴る

露けき霧に

我が手足は凍え

我が血は静けき
戦きにうちふるひ
我がかそけき脈は
運行を忘れ
我れは弱り
沈み
やがて消えぬ

この一篇が、愛人『ファオン頌』であるか、ごうかは不明であるが、戀愛浄土の極地に立つた、戀人の歡びとおののきが、はつきりと描き出されてゐる。讀後の私達を、この

一篇の構想の真中に惹き付けるに、極めて容易な力に溢れてゐる。

愛はふたたび

愛はふたたび
我が魂をゆるがす
櫛の枝もて
金套つけたる山間の谿谷の
一抹の光を受けたる
平地の如くにも

愛はふたたび
心を奪ふ力と
苦き甘さもて
ゆすりまた打つ
固く縛りつけられた
蛇の如くにも

薔薇の歌

戀愛の哀樂の交錯した、情緒を表現するに、後半部の形容の力強さを、しみじみと味はなくてはならない。

もしツォイス、宴の花の
王を選ばば
薔薇を召して
おごそかにかざし給はん

薔薇は、薔薇は
地上の恵み
その上に生ふる千草の
光なれば

薔薇は、薔薇は

花のまなざし

みづからを美しと見る

牧場の恥ろひなれば

恐れなき烈情の下に座する

蒼白き戀人には

胸をついて

ほとばしる電光

薔薇は戀を見つぎ

薔薇は

客のため祈るシプリスの朱唇に

蓋を捧ぐ

薔薇は美しくしてその葉を

世界のためにまき

西より笑ふ風に

萼うてなの笑へば

その萼の絶えぬ

ゆるぎをよろこぶ

サッフオが、心から好きであつた薔薇は、詩人アナクレオ

ンの言葉を藉りると、『花の中の花』であるし、『エロスの神の花』でもある。そして、『薔薇の咲く時は、神神もこれを祝し歡ぶ。』のである。『もしツォイス、宴うたげの花の……』と歌ひ出したところは、この詩の作者ならずとも、これ以上には、讚美の熱情を現すことが、できまいかと思はれる。

詩を愛でぬ者へ

御身は死にて横はり

御身の記憶は

全地に空し

御身は未だビエリヤ河の

薔薇を

装ひたまひしことのなければ

御身の運命は

不知の悪魔に伴はれ

冷淡無明の

闇に散り失せ給ひなん

古代のギリシヤでは、哲人や詩人は、全く万能視されてゐた。詩人の中でも、ビエリヤ河畔に咲く、薔薇で編んだ冠を戴くのを、非常な榮譽としてゐた。『詩人第一』の詩人と薔薇は、ギリシヤ國民にとつて、人と花の總稱であつた。

デイカに送る

愛を積みし

葉と花をもて

君が美しき髪のために

花輪を編めや

君が柔らかき指^{および}もて

娘よ

美しきおらんだせりの

花冠を編めや

花のあまりに美しきに

運命の女神等

天つ御座より

見下し給ひて

あるひは冠ある

祈の方に

冠なきをすてて

振り向きやしたまひつらん

花を熱愛した、サッフオの繊美なこの空想！私達は、これを單に詩的空想と速断して了はれやうか。否、否といつて、

この提言を遮らなければならぬ。『花のあまりに美しきに』
女神達が、花の冠をかぶつた人の祈禱に耳を貸すことは、
素より當然である。人界も天界も、美は絶体である――

返らぬこと

乙女時代よ

乙女時代よ

何にか

我をはなれて逝きし

再び我れは來まじ

再び我れは君に來まじ

若き日の思ひ出でほご、人にとつてセンシブルなものはない。一度去つたが最後、もう二度とは還つて來ない、眞赤な若さを追憶するごとに、何人が眞黒な老ひのペエソスに涙を流さないものがあらうぞ。殊に、花とその姿を競ひ、星とその美を争ふ處女時代のペエヂを、一枚一枚づつ繰つて行く時には、今更らのやうに、身をつまされるのである。

戀愛少女賦

いとしき母君

今日しも吾は

紡ぐに堪えず

わが心を盗みて去りし

かの若人の故にこそ

ナイイヴそのものの叙法、といふことができやう。あだかも、マドリガルの小曲でも聴いてゐる感銘である。最もすなほで、やさしく、且つ美しい。その可愛さが、胸の扉を柔らかに叩きおとづれる。

夕 暮

おお、ヘスペラス

御身は万物を

その家路に導き給ふ

輝やかな晝は

遠く追ひやられて

羊と山羊とは

こころよき檻に飯る

また御身は

幼児達を

その母の傍に送り給ふ

よいテンペラメントをもつたでなくしては、かうした、

情緒こまやかな、作品を収めることはできない。この何等
街氣や斧鑿の痕のない、實に素直な純眞な牧歌的味に満ち
てゐることが、私達の心を、しつかりと握り堅めるに成功
してゐる。ヘスペラスは、宵の明星を指す。

ヴィナスに祈る

クウプリスよ

ここに來まして

黄金の盞より

戀と楽しみとに

宴のみやびなる喜びを混へし

御酒をば

そそぎ給へや

美と戀との渦卷のなかに、われとわが身を委せた、麗人サ
ッフォが、美と戀の女神に祈禱を捧げる心にあつたことは、
さもありさうなことである。『クウプリス』(ヴィナス)に向
つて、天上の戀の美酒を、地上のわれに頒ち與へよと歌つ
たのは、ふさはしい限りである。

レスボスの島乙女

ミティレネがた

侘^への孤^わ閨^いの

白日^{ひる}ながき

レスボスの島乙女

あはれ、また、小夜もぞながき

みなどのそらに

星照りて

晴れしひと日も

夕されば花をとめ

なににうき身をやつすらむ

金色のいり日の

吹上のあたりをふみて

ふるさといそぐ商びとよ

戀しききみを

おもへるや

いなとよ、さはれ天^{あま}離^さかる

こひしき家に

かへるとき

更けやすき小夜にもあるかな

わが小胸ときめきにけり

美しい島國のレスボス、春の目覺めのうちにある、そのレスボスのうら若い娘の心のあけくれは、どんな美しいことであらう。

女詩人サッフオ (完)

大正十四年一月廿五日印刷
大正十四年一月三十日發行

女詩人サッフオ

【定價金貳圓】

著者 法月歌客

發行所 兼印刷者 野村藤藏

東京市下谷區谷中初音町四ノ二六

印刷所 小島印刷所

東京市下谷區谷中初音町四ノ二六

發行所

白星院

振替東京六七二八二番

複製不許

著作
所有

終

